

高校の【総合的な探究の時間】 探究とは？ 探求や調べ学習との違い

https://www.noltyplanners.co.jp/schola/inquiry-program/column/1239401_4214.html

Copyright NOLTY Planners Co., LTD . All Rights Reserved. より

そもそも探究とはどのようなものなのか？ 「探究」と「探求」の違いは何か？ 「調べ学習」とは何が違うのか？ このあたりを整理してみたいと思います。

「探究」と「探求」の違い 目的が少し異なる

「探求」とは、探し求めると書くように何かを探し求め手に入れようとするようになります。一方で「探究」とは、探し究めると書くように何かを探しながら究めていくようになります。学問を究めたり、真相を究めるといった場合に使われます。

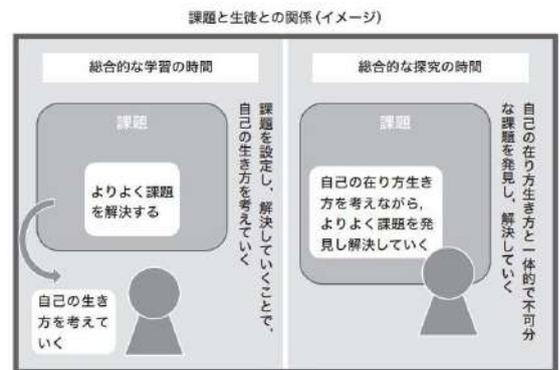
「総合的な学習の時間」と「総合的な探究の時間」の違い

両者の違いは(中略)、「総合的な学習の時間」は、課題を解決することで自己の生き方を考えていく学びであるのに対して、「総合的な探究の時間」は、**自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し、解決していくような学びを展開していく**、ということです。

「総合的な学習の時間」が
課題解決 → 自己の生き方の順 であること

「総合的な探究の時間」は
それが同時 であることが違いと言えます。

つまり、生徒自身が興味を持っていることと課題発見を結びつけて学んでいくこと、を狙っているように思われます。



「探究」と「研究」の違い

- 研究の特徴
 1. 何らかの仮説について詳しく調べたり深く考えて、結論を導くこと
 2. 何かの成果を出すこと
 3. より専門性が高く、多くの時間を割くこと
 4. 専門性を持った他の人材から評価を受けること
- 探究の特徴
 1. **自己の在り方生き方を考えながら、物事の本質を探ったり見極めたりすること**
 2. 資質・能力育成が目的である
 3. 年間 35 コマ～

特に費やすことができる時間に大きな違いがあります。総合的な探究の時間で研究成果を求めて出すような活動は難しいのではないかと想像されます。また、学習指導要領にも総合的な探究の時間の**目的は、資質・能力の育成**と記載されています。

「調べ学習」と「探究」の違い

探究との違いでいいますと、自分なりの意見や考えを持つという部分や自ら課題を発見するという部分がプロセスとして明確にあるかという点で少し曖昧な気もしますが、しっかり盛り込まれていれば探究との違いはそこまで感じません。**調べ学習は、探究の中にある一つのプロセスとも考えられると思います。調べ学習を探究の中にしっかりと盛り込んでいくことで、より良い探究活動になるのではないのでしょうか。**

結局、探究とは何か？ 生徒が自らの興味があることに対して深く学んでいく。

探究活動を、**学びの型(フレームワーク)**を習得する機会として捉えると整理しやすいのではないのでしょうか。その学び方や学びの経験が授業や進路等の場面において汎用的・応用的に活かされていきます。そこを目的にすると成果の有無にはこだわらなくてもよくなるのではないのでしょうか。

「学びの本質を変える」探求学習

「探究」(探究学習)とは何か

探究学習とは、何なのでしょう。文部科学省は、「問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく一連の学習活動のこと」と、定義しています。

つまり、問題解決型の学習ということです。これまでの一般的な科目が、ともすると知識・技能を習得させることを中心にした授業になっていたのに対し、自ら課題を発見し、その課題を解決するためのプロセスを体験しながらスキルを習得していくというような実社会に通用するような資質・能力を育てる学習が「探究」だということです。

これから、グローバル化しAI(人工知能)化していく社会の中で、我々に求められる資質・能力は、

主体的に課題を発見・解決し、協働しながら新しいものを創造していく力

だと思います。そのよう資質・能力を育てるのが探究学習といえるでしょう。

実際の探究学習

では探究学習とは、実際にどのように行われるのでしょうか。探究学習は、生徒の自発的な疑問から始まります。生徒たちが生活の中で「なに」「なぜ」「どうやって」など疑問を持つことが始まります。そして起こった疑問を解き明かそうとするのが「探究」です。疑問を解き明かすためには、

**「課題の設定」→「情報の収集」→「整理・分析」→
「まとめ・表現」→「振り返り」→「新たな課題の設定」**

という活動のサイクルを繰り返すこととなります。



まずは、はじめに持った素朴な「疑問」を、きちんとした「問い」にします。例えば、動物園で孔雀を見て「なんで孔雀の羽は大きくて派手なんだろう」という疑問を持ったとしましょう。羽が派手なのは雄だけで、雌はそうではないということぐらいは動物園のその場で知ることができるでしょう。そこで、この興味・関心を膨らませて探究学習をするために、「なぜ孔雀の雄は派手な羽を持つのか」という「問い」を立てます。

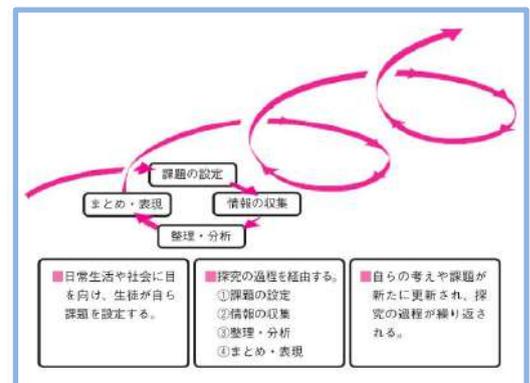
「問い」の次には、自分なりの「仮説」を考えます。「孔雀の雄は雌の気をひくために派手な羽を広げるのだろう。種の保存のために有用なのだろう」と。この仮説を「検証」するためには、いくつか調べなければいけないことがあります。

ここで「課題を設定」します。①本当に雌孔雀は雄孔雀の羽の模様にひかれるのか、②大きく派手な羽は目立ち過ぎて天敵から狙われやすいのか、③狙われやすく生きていけるのか、などです。

こうして課題が設定されると、それぞれについて「情報を収集」します。情報はインターネットでも探せると思いますが、きちんと検証するためには信頼できる出典に頼る必要があります。図書館などの書籍で調べることが必要です。また、必要に応じて実地調査やインタビュー調査などのフィールドワークを行うこともあります。

そして、収集した情報を「整理・分析」して、さいごに、論文やポスター(模造紙)、プレゼンテーションなどに「まとめ・表現(発表)」します。

大事なのは、最後にまとめた際に、分からないことが残ったり、新たな課題が出てきたことをまとめたり「振り返り」しておくことです。それが次の探究活動「新たな課題の設定」につながっていきます。



探究で身に付く力(評価) (ルーブリック表)

<https://www.core-net.net/g-edu/issue/6/>

探究学習で身に付く資質・能力は「主体的に課題を発見・解決し協働しながら新しいものを創造していく力」だと述べましたが、具体的にはどのようなことでしょうか。そして、そのような資質・能力が身に付いたかどうかをどのように評価するのでしょうか。

主体性や問題発見力、問題解決力、協働する力、創造力などは、なかなかペーパーテストでは測れません。学習の結果アウトプットした発表物(論文、プレゼンテーション等)や学習のプロセスでどのような活動をしたか(どのような力を発揮したか)が評価の対象になります。そして、それらの評価は**何らかの達成水準が明確にされていないと確かな評価はできません**。そこで注目されているのが「ルーブリック」です。探究を先進的に推進する学校にはルーブリックのある学校が多くあります。

ルーブリックとは何でしょうか。簡単にいえば、評価するいくつかの項目(評価基準)に対して、5段階程度の達成すべき水準(評価基準)を言葉で書き表したものです。評価したい資質・能力の項目が10個あって、S・A・B・C・Dの5段階の基準があれば、10×5の50個のマス目があるマトリクス表になるということです。

	4	3	2	1
内容に関する知識	プレゼン内容の知識を十分に実証し、プラスの質問にも詳しく答えられる	プレゼン内容についてすべて説明できるが、プラスの質問は答えられない	プレゼン内容の知識に自信はないが、初歩的な質問には答えられる	プレゼン内容の知識が乏しく、内容に関する質問に答えられない
図表	プレゼン資料を視覚的に分かりやすくするよう概念や数値に関するものを図表化している	プレゼン資料を視覚的に分かりやすくするよう数値に関するものは図表化している	図表化したものはあるが、プレゼンの内容を支持していない	図表やグラフを使用していない
目線	聞き手とアイコンタクトを保ち、手元の資料はほとんど見ていない	聞き手とアイコンタクトをとっているが、頻りに手元の資料を見ている	時々聞き手とアイコンタクトをとっているが、ほとんど資料を読んでいる	資料を読んでいるだけでアイコンタクトはできていない
声・意思	明確な声で、相手に伝える意思をはっきりと持っている	明確な声だが、相手に伝える意思は弱い	声が聞きにくく、相手に伝わりにくい	声が聞きにくく、相手に伝える意思を感じられない

このようなルーブリック表を予め用意しておき、探究学習を始める際に、それ

を使って生徒に目標を提示します。例えば「問題発見力」ではAを目指す、「協働する力」ではBを目指す、といったような感じです。そして、学習の途中でも目標を意識させ、適宜フィードバックしながら、学習の区切りにおいては振り返り評価をします。方法としては、教師による評価だけでなく、自己評価や相互評価(生徒同士でお互いを評価する)の場合もあります。

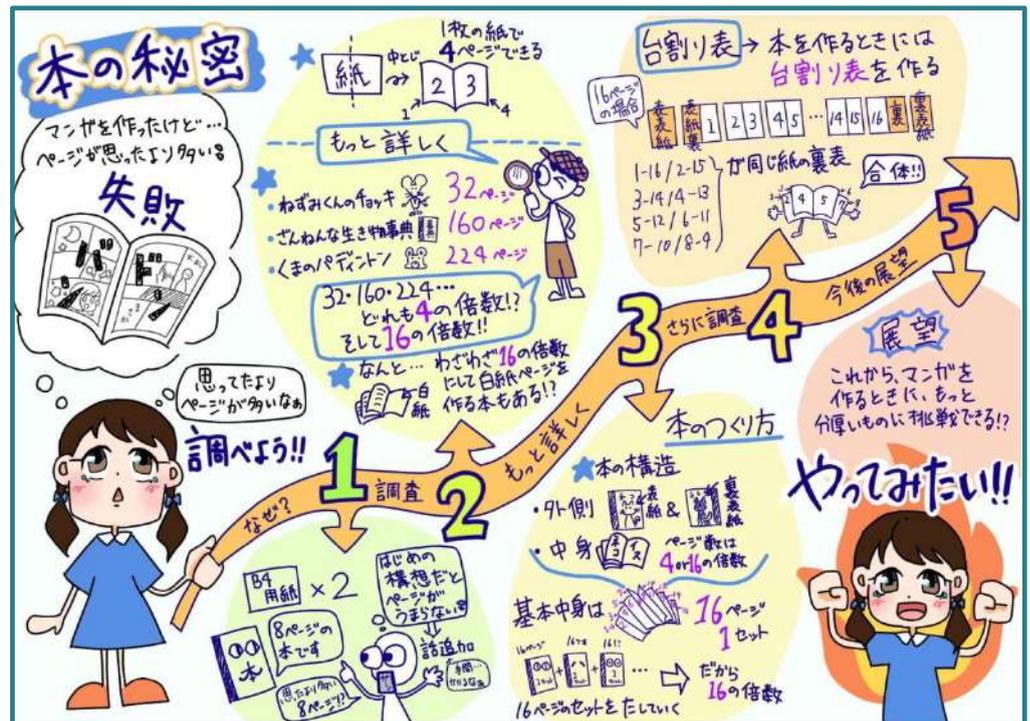
いずれにしても、探究学習においては、知識の習得よりも、結果の出来栄やプロセスにおける力の発揮に評価の重点が置かれます。

(ポートフォリオ)

NPO 法人学習創造フォーラム <http://npo-filc.org/inquiry/>

順番や書き方は自由

- どのような活動をしたか
- その活動をするときに、どんな疑問をもったか
- その活動を通して、どのようなことを解決しようと思ったか
- どんなことをどうやって調べたか
- 調べてわかったことは何か
- さらに調べたくなったことは何か
- さらに調べてわかったことは何か
- 調べたことから、どんなことを考えたか
- みんなに聞いてもらいたい事は何か



探究のポイント <https://www.core-net.net/g-edu/issue/7/>

何事もそうですが、形だけ真似しても成果は出ません。本当に効果のある探究学習を行うためにはどのようなことに注意すればよいのか、ポイントを整理しておきましょう。

① 探究の「スキル」をきちんと教えているか

探究学習は、問題解決のプロセスです。つまり、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」という学習の過程のそれぞれにおいて、過去の経験によるノウハウやスキルが理論化され蓄積されています。生徒による主体的な学びだからといって野放しにして自由に活動させるのではなく、基礎的なノウハウやスキルはきちんと教えるべきです。それらのスキルを身に付けることが資質・能力を向上させることにつながります。

② 学習活動に「フィールドワーク」を取り入れているか

フィールドワークとは現地・現場での調査・研究のことです。つまり、実態や実物、本物を見るということです。「課題の設定」の場面においては、自然科学的なことでは、実際に植物・動物や自然現象を観察して自ら疑問を持つこと。社会科学的なことでも、実際に街に出てみて、人々の活動を観察して疑問を持つこと。「情報の収集」の場面においても、教室から外に出て、実際に目で見てデータを集めたり、人にインタビューをして実態に即した情報を集めることが、もちろん時間と手間がかかりますので、年に1～2回程度のフィールドワークの機会でもよいでしょう。社会科見学や林間学校等を、探究学習の一環として捉えて、その目的や活動内容を見直すのが近道だと思います。

③ 図書館の活用方法を学び、図書館をフルに活用しているか

言わずもがなですが、学校の中で一番情報が豊富なのは図書館です。図書館の活用方法を学び、図書館という場をフルに活用した「情報の収集」を行うとよいでしょう。また、司書・司書教諭の方々のノウハウをいかに活用することも大事なポイントです。情報収集の方法だけでなく、論文の書き方やプレゼンテーションにおける表現方法など探究学習に関するノウハウがたくさん詰まっています。これを活用しない手はないです。

④ デジタルとアナログを、うまくバランス取りながら活用しているか

ICT機器をうまく使えば、「情報の収集」や「まとめ・表現」の場面ではかなり威力を発揮します。しかし、インターネットの情報には真贋入り混じっていますし、自分の頭で考える前に安易にネット検索してしまうのは思考力の向上を妨げます。また便利になればなるほど、その作業プロセスにあったはずの思考過程が飛ばされてしまったりもします。つまり、大事なものは、デジタルとアナログのメリット・デメリットをきちんと理解し、うまくバランス取りながら活用することです。その使い分けを学ぶ場をきちんと織り込んでおくことが探究学習においてとても大切なことだと思います。

⑤ 「問い」を自ら立てる活動をきちんと行っているか

最後5点目ですが、「問い」を自ら立てる活動をきちんと行っているかどうか、探究学習の最大のポイントです。探究学習と調べ学習の違いは、「問い」を自ら立てているかどうかです。調べ学習の場合は課題が既に設定されていて、それを調べて答えを出すのですが、探究学習は、

自ら疑問に思ったことを「問い」にし、それに対する「仮説」を立てるという部分が欠かせません。

実のところは調べ学習の域を出ていないという学校が多いのも現状です。

なぜ、この点が重要なのかというと、自ら「問い」を立てて学習するということが主体的な学びにとってとても大切だからです。また、その「問い」に自ら「仮説」を立てることが思考力にとってとても大切だからです。

そして、それらの活動は、他の教科等の学習へも波及します。いま何を学ぼうとしているのか、このことを学ぶことがどのように生きるのか、ということを手で自ら考えることができます。受動的な学びを能動的な学びに変えることができるのです。これが学びの本質を変えるのです。

探究学習の本質を理解してカリキュラムを組まれることを期待しています

答えのない問いに向き合い、生徒が自らの可能性に気づく学びを。

クエストエデュケーション 2019. 11. 26 https://eduq.jp/quest_education/

探究学習とは、答えのない問いに向き合うこと

探究学習の重要な特徴のひとつとして、「答えのない問いに向き合うこと」があげられます。答えのない問いに向き合うとは、「誰も答えをもっていないこと」を自覚して、「自分たちで答えを創り出そうとしていくこと」です。たとえば、「働くとはどういうことか」「生きるとはどういうことか」といった問いは、誰かが答えをもっているわけではありません。自分自身に問いかけていくことによって、自分なりの答えを創り出していくものです。**答えのない問いに、自分なりの答えをみつけていくこのプロセスは、創造的な探究学習に欠かせないものです。**

自己肯定感が上がり、自ら行動するように。楽しくて学校に来るようになる。

答えのない問いに向き合うことにより、生徒たちは**自分自身の新しい可能性を発見することができます**ようになります。自分はどうか、自分は何を答えとするのか。すでにある答えを理解したり記憶したりするのではなく、答えを自分が決めていくことで、「自分はこんなことを考えていたのか」「こんな考えが生まれるのか」と、眠っていた自らの可能性の大きさに気づくことができるのです。その発見は、生徒たちにとって何よりも嬉しく、そして楽しい経験となります。自己肯定感があがっていくことにつながります。

授業がつらいから学校に行きたくないと言っていた生徒が、探究学習の授業が始まると学校に来るようになるということがあります。それはこのような**「自らの可能性に気づく楽しみ」が探究学習にある**からかもしれません。

自分の可能性に気づき、自己肯定感があがっていくと、自分で考えることはますます楽しいものになっていきます。探究学習の授業の外でも、自ら考え、自ら行動するようになっていくでしょう。

探究学習で重要なのは「先生の向き合い方」

生徒たちが自らの可能性に気づき、自ら考え行動するようになっていく。そんな「答えのない問いに向き合う」探究学習の授業を実践するためには、**どのようなテーマに取り組むか、何について考えるかといった授業内容以上に、生徒に対する先生の向き合い方がとても重要**となってきます。

生徒たちに「答えを提示する」のではなく、生徒たちが自ら考え、自ら答えを出していけるように「サポートしていく」。そんな先生の向き合い方が、生徒たちの主体的な学びを生み出します。

「お金持ちになりたい」と生徒が語ったらどうするか

しかし、例えば、探究学習の授業で、「自分自身がどうありたいか」をテーマにしてクラスで考えているとします。そんな時に、「お金持ちになりたい」と生徒が語ったら、どのように思いますか。もしかしたら、もっと真面目に考えて欲しい、これだと教室に掲示できないなと思って、「別なことでは何かない？」と聞きたくなるかもしれません。

しかし、そうすると「お金持ちになりたい」という生徒の思いを、先生が無視することにつながってしまいます。生徒は自ら考え、自ら答えを出したのに、「それではいけないのだ」「先生がほしい答えを探さなければ」と感じてしまうでしょう。自分の考えはだめだと自己肯定感が下がったり、人がほしい答えを推測していることに力を尽くすようになっていってしまいます。

この例で言えば、「お金持ちになりたい」と思うに至ったわけについて聞いていくことが考えられます。なんでそう思ったのだろう、他のことよりもお金に価値をおいているのってなぜなのだろう。**生徒の考えや答えに関心を持ち、一緒に答えを探していくパートナーとして、共に考えていく姿勢**で関わっていく。そうすることで、生徒は励まされ、答えのない問いに向き合い、自ら考えて答えを出すことを楽しめるようになるでしょう。

まとめ：未来を前にしたら誰もが答えを知らない

答えがないからこそそのハラハラする気持ちややきもきする気持ちもありますが、どこまでも生徒を信じて、活動の中で探究することの楽しさを感じられるように環境を整えていく。**未来を前にしたときには、誰もが答えを知らない素人です。生徒が出してくる答えを期待しワクワクしながら、一緒に楽しんでいけると素敵だなと思います。**

「テーマ」をどう決めるか? 「問い」をつくるときに意識すべき3つのこと

クエストエデュケーション 2019.12.27 https://eduq.jp/quest_education/

どのようにテーマを設定するか、どんな問いではじめるか、ここで躓くことがよくあります。「生きるとはどういうことか」といった哲学的なものから、「新商品やサービスを作ろう」といった企業で扱われるようなもの、さらには「地域の活性化について考えよう」といった社会的な課題を考えるものなど、様々な問いが考えられます。つい取組みたくなってしまう、そして考えているうちに新たな自分に気付いていく問いにするためには、どのようなことを意識すればよいでしょう。

探究学習における「テーマ」と「問い」の違い

「テーマ」というのは、「進路」「社会課題」「SDGs」といった探求を進めていく上での方向性を指し示すような機能を果たすものです。しかし、ただ「SDGsについて考えよう」というだけでは、そこから何か自分なりの答えを見出したり、新しい考えが創出されるのは難しいでしょう。テーマを決めたら、それをそのまま提示するというだけではなかなかうまくいかないのです。

そこで必要となるのが、「問い」です。「問い」とは、テーマにひも付きながら具体的な探求を進めていくための手がかりの機能を果たすものです。この手がかりがあることによって、自分のこと、社会のこと、世界のことについて探求を進めていくことが可能になります。つまり、「問い」を作ることによって、探求を駆動させることができるのです。

探究学習で「問い」をつくる時に意識すべき3つのポイント

まずは自分に問いかけてみるといいかも知れません。「どんなことを聞かれたら、ついSDGsについて考えたくなるだろうか」と。そして問いを作る時には、下の3つのポイントを意識しましょう。

1 気軽に考えてみようと思えるくらい「簡単な問い」かどうか? **【入口の簡単さ】**

問いが抽象的なものや哲学的なものであると、考えるのがつらかったり、探究学習が進まなくなってしまう場合もあります。例えば、いきなり「生きるとは何か」と問われたら。とまどったり、難しいと感じることも少なくありません。そのため、まず問いを設定するときには、うっかり考えたくなくなってしまうような気軽な問いから始まっていくこと。そうしていくうちに、「生きるとは何か」という自分自身の価値観に、いつのまにかたどりつくこともできるでしょう。

例えば、ある探究学習プログラムでは、「一人ひとりの幸せと共によりよい社会を実現する新商品を提案せよ」というように、企業からのミッションという形でテーマを設定しています。

最初に向き合う問いは、誰しもが意見をもっており、考えやすい簡単なものから始めること。階段をひとつずつあがるように、ステップをつくっていくことを意識してみてください。

2 どんな答えも答えになり得るくらい懐の「広さがある問い」かどうか? **【解釈の多様性】**

このポイントが考慮されないと、結局は答えのある問いになってしまい、答え探しゲームが始まってしまう。例えば、「卒業式にどんな態度で臨みたいですか」という問いは、どうでしょう。

「礼儀正しく」とか「真面目に」といった答えがあるのではないかと感じさせるこのような問いは、解釈の多様性に開かれているとはいえません。「どんな答えであっても答えになるような問い」となっていることがポイントです。例えば、「本当にやりたい卒業式とは」という問いであれば、同じ卒業式についてであっても、あらゆる答えに開かれているように感じられます。

多くの答えを許容できる問いは、探究学習が本来もっている、自分で答えを作り出していくこと、自分の可能性を発見していくことを実現してくれるでしょう。

3 追求しようと思えばどこまでも追求できる「深さがある問い」であるか? **【深掘りの可能性】**

簡単に答えがでてしまうような問い、すぐに納得ができてしまいそうな問いにしてしまうと、そこで探求が止まってしまう。例えば、「教員のなり方とは」といった問いは、調べ学習には向いていますが、探究学習を進めていく上では難しい側面があります。新しい自分の可能性の発見には至らず、自分もっていた意見を抽出しただけで終わってしまうからです。自分の今持っている意見以上のものを追求していくような問いがあることで、より深く追求していくことができます。

例えば、「地域にとっての宝物とは何か」との問いは、何をもって宝物とするのか、その価値はなぜ大切なのか、その地域らしさとは何かといったように、問いを派生させてどんどんと深掘って行くことができます。そうした深掘りの可能性を担保していく問いを設定することによって、この問いに向き合うまでは考えてもみななかった自分の可能性へと気付くことができるのです。

「振り返り」とは？ 探究学習で学びにつながる4つのポイント

クエストエデュケーション 2020.08.07 https://eduq.jp/quest_education/

授業の「振り返り」は何のためにやるのか **自分にとっての価値を言語化する意味**

人は、学びの過程において様々な経験をしています。その瞬間だけでは受け取りきれないほどの情報や刺激があるために、自分がなにを経験したのか、どんなときにどう感じたのか、意識にのぼることなく、言語化もされずに、「なんとなくこうだった」で終わってしまうことも多いのです。

振り返りは、一人一人がどのようなプロセスで、今どこにいるのかを明らかにするためのものです。振り返りは、**生徒が授業での経験を自分なりに解釈するためのものであり、授業の学びが「自分にとってどんな価値があったのか」を考える場をつくる**ことが大切です。振り返りを通して今までほんやりとしていた経験を、自分のものにすることができ、新たな自分を発見し、自分の興味関心や特徴に自信をもって、これからは生かしていくことができます。

生徒の学びを深める振り返りの方法 **4つのポイント**

1 時間の使い方を工夫する **【毎時間と単元まとめの使い分け】**

現実的に時間を増やすことは難しいので、毎回の授業の終わりで言う振り返りと、学習の最後に行く振り返りとで、意味付けを変えることが有効です。毎回の授業では、あとで見返したときにその授業で自分が感じていたことがわかるように**メモしておく感覚**で取り組んでいきます。一方で、学習の最後に行く振り返りでは、1授業時間を使って、毎時の授業の振り返りを見返して、経験を解釈していくことに時間を使っていくのです。このときには、本来の意味で振り返りを行えるように、じっくりと時間をとり、**自分自身と学びについての振り返り**が行えるようにしていくとよいでしょう。

2 生徒の言葉を受けとめる **【言語化による本人の自覚と体感】**

大切なのは、**振り返りをすれば「学びにつながる」ということを、生徒自身が体感していくこと**です。自分にとって、この経験はどんな意味があったのかを言語化していったときのすっきりとした感覚や、腑に落ちる感覚を味わうことができたならば、それが振り返りを行なう目的になります。なぜ振り返りを行うのかについて先生の言葉で語ることも大切ですが、振り返りの場を、生徒がまたやりたいと思えるようなものにすることが大切です。振り返りの際に出てきた言葉に対して、受容的な態度で受け止め、振り返りをやった努力や自分自身を見つめたことに対して声をかけていきましょう。

3 生徒たちに問いかける **【観点を決めて対話しながら振り返る】**

先生から問いかけをしたり、観点を決めて振り返りをしてみるのが考えられます。たとえば、

【事実】 そのときに起こったことは何か	【変化】 自分にとって転機になった出来事はなにか
【比較】 他の経験と比べてみてどうか	【理由】 なぜ学びにつながったか
【抽出】 他の場面でも使えそうな学びはなにか	

振り返りに行き詰まっている生徒への問いかけとしてこうした観点を念頭に置いて対話しながら振り返ることが有意義ではないでしょうか。また、**今回の振り返りでは、この観点到重点をおいて考えてみよう**といったように、**観点を絞って振り返る経験を積んでいく**ことも有効です。

4 安心安全の場をつくる **【振り返りそのものが学び】**

振り返りを書くときに、じっくりと内省する契機になりえないことがあります。「この授業でのねらいはこれだったから、それっぽいことを書いておけばいい」との気持ちを助長し、学びの振り返りというよりも、模範解答探しをもたらします。これは、せっかく自分の学びになりうる経験の価値を削いでしまう結果になります。そのため、振り返りを行うときには、何を書いても問題ないこと、評価には一切つながらないことを明示的に伝えることが欠かせないでしょう。それは、**振り返りがそもそもその人にとっての学びを紡いでいくもの**だからです。

隣の人とも先生のものとも違った、紡ぎ出された自分にとっての答えは、誰かによって評価されることはない、その人にとって価値あるものになります。よりよい振り返りを実践することは、よりよい学びを生成することと表裏一体であると考えています。ここにも特効薬的な答えは存在していません。学びに関わる全ての人が学びの過程にいることが何よりも大切です。



『探究学習』

<https://kaichigakuensougoubu.com/tanq>

自らの興味関心をベースに「探究テーマ」を設定し、
疑問→仮説→検証→発表というサイクルで、主体的に学ぶ力を育てます。



開智では開校当初より「探究」をカリキュラムの中核に据え、子ども達の学習意欲や好奇心を高め、思考力・表現力を育てています。また、一方向型の講義型授業だけでなく、子どもたちが能動的に学び合う「探究型の授業」を多く取り入れています。

1 パーソナル

興味関心を授業にする

全ての学習の基本は好奇心、意欲です。開智では普通の学校生活や様々な行事をできるだけ子どもたちが自主的に企画・運営できるようサポートします。安全面に配慮しながら、子どもたちが好きなことを思い切りさせることで、「学ぶ意欲」「好奇心」を大きく育てます。

【パーソナルのテーマ例】物語づくり／そろばん／英会話／レゴブロック・編み物／ロボット製作／実験／図鑑作り／なわとび

2 探究

テーマを深く掘り下げる

「読み・書き・計算」を繰り返す学びは年齢が低いうちの方が取り組みやすい学びです。朝の10分間の読書と昼休み後の計算練習を継続して行うことで脳の機能を高め、将来の思考力・創造力の基礎作りをします。また、これらの学習は心を落ち着かせ、集中力を高める効果もあります。

【探究テーマ例】遺伝子疾患／遺伝病／骨のしくみ（人・動物・恐竜の比較）／裁判・循環小数／どうしたら早く走れるのか etc.

3 プレゼンテーション

情報を整理し、発信する

1年生の時から、自分が探究したことをプレゼンテーションする「発表会」が行われます。

【上写真】セカンダリーでは1年間で最も優れた探究実践を表彰し、全校生徒の前でプレゼンテーションを行います。

4 フィールドワーク

自分の手と足で確かめる

8年生は自分の探究テーマにあわせて、自ら行先を決め、大学教授や専門家などを訪ねて、探究の学びを深めるフィールドワークに出かけます。



加齢による色覚の変化

左側の虹彩の色が異なる。もしも一方の虹彩の虹彩の一部が変色する現象のこと。パイアイ、オッドアイを型に示す。虹彩に影物に対して使われることが多い。

非症候型眼色素白点症

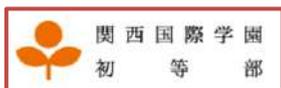
メラニン色素を生成する際に、重要な役割を果たすチロジナーゼという酵素が働かずメラニンを生成できない。あるいは、チロジナーゼ活性はあるものの、その働きが非常に弱く、十分なメラニンを生成できないことが原因。

白点症<アルビニズム>

メラニン色素の生成に必要不可欠なチロシナーゼ酵素が働かず、色素が生成できず、瞳や皮膚が白く、髪は白く生え始める。先天性のものもあるが、後天的なものもある。メラニン色素の生成に必要不可欠なチロシナーゼ酵素が働かず、色素が生成できず、瞳や皮膚が白く、髪は白く生え始める。先天性のものもあるが、後天的なものもある。

遺伝的疾患の発症パターンを示す図表。

正常 キャリアー 発症



教師の役割

従来の学習では、教師が「知っている人」、子どもが「知らない人」という明確な線引きの下で授業が行われてきました。先生から教えてもらったことだけを覚えれば良く、それが成績として反映されます。しかし探究学習では、教師と子どもが同じ視点に立ち、知らないことに興味関心を持ち、疑問を抱き、共に自調自考しながら答えを見つけ出します。探究学習のクラスでは、教師は「ティーチャー」ではなく「ファシリテーター」（進行役）だという表現もよく見られます。

「知っていること」を基礎に「知らないこと」に挑む

子どもが知らないことを教師が教えるのではなく、探究学習では、まず子どもが何を知っているかを探り、それを基に探究することで新たな発見と感動を得ます。

知っていることを引き出すことで、それに関連する知らないことに興味を持って探究できます。「電池ってどんな仕組み?」、「なぜ磁石に物がくっついたり離れたりするの?」などの疑問を抱き、それを自分で考え、調べ、時には推論を立てたり実験をしたりして答えを探ります。

KWL チャートの活用

探究学習では「KWL チャート」というものを活用しています。

K=Know (知っていること) W=Want to know (知りたいこと)

L=Learned (知ったこと) を意味します。

探究のユニットの間、知っていること、知りたいこと、知ったことを自由に付箋に書いて貼っていきます。教師はそれらを読みながら授業を進めていきます。既に知っていることを一から教える必要はなく、知りたいことを中心に学習を進めることによって、ユニットを通して関心を持続して探究に取り組むことができます。

教師も、「本当はこういうことを学んでほしい」と思えば、自分で「電気が流れるものと流れないものってなんだろう?」などと付箋に書いてチャートに貼ることもできます。ユニットが進むにつれて、初めは何もなかったL(知ったこと)の部分がどんどん埋まっていくよう、資料や具体物を用意して子どもの探究をサポートします。



実生活との関連

当学園で行われた授業では、不自由さを実際に体験することで「秩序」という概念について考えることができました。他にも実生活の中で「時間」「交通ルール」などの「秩序」を見つけることもでき、その一部として、順序を守ることの大切さを理解することもできました。

子ども自ら意味を構築していく「構成主義」

探究学習は単に調べ学習ではありません。クラスで議論をすることでもありません。子どもたちが既有知識を基に新しいことに対して自分たちで意味を構築していく「構成主義」に基づいています。子どもが辿り着くべき答えを限定せず、あらゆる可能性を模索させ、結論を導かせます。勿論それらの結論が正しいかどうか、自分自身で振り返って検討、分析させ、次の学びに繋げていきます。

これを通して自分の学びに責任を持ち、学習をさせられているとは感じず、自ら進んで学び、学校を去った後もずっと学び探究し続ける心を養います。探究学習、構成主義などの概念をもとに子どもたちが生きる時代に必要な素質を身に付けるために教師も日々学びながら成長しています。また日々ご家庭でも、些細なことにも疑問、関心を持ち、広い視野を持って世界を見ることが出来る刺激と経験を与えることで、さらに探究学習が楽しく有意義なものとなります。

POI 探究プログラム

探究のカリキュラムを全体的にまとめたもので、6つの「教科の枠を超えたテーマ」があります。「私たちは何者なのか」、「私たちはどのような場所、時代に生きているのか」、「私たちはどのように自分を表現するのか」、「世界はどのように動いているのか」、「私たちはどのように自分たちを組織しているのか」、「地球の共有」の6つです。各学年の子どもが年間を通して6つのテーマを、それぞれ1つの探究ユニット(UOI)として学習します。

